

# University Libraries

## 変わる大学附属図書館

特集  
Special Section

「研究書を収集する場」「学生が自習する場所」一。そんな画一的なイメージを抱かれがちだった大学附属図書館。しかし今、その機能やポテンシャルに着目し、さらに機能強化する動きが全国の大学で広がっている。岡山大学でも発信力や教育力を高めようと、さまざまな取り組みを行っており、今後さらに変貌を遂げることが期待される。岡山大学附属図書館の使命と未来図について、担当理事の許南浩企画・総務担当理事に聞いた。

### ▶担当の許理事に聞く

まず原点から図書館の存在意義について考える必要がある。人類が進歩してきたのは知恵を集積し、効率よくそれを次世代に授けてきたから。当初は「知恵を集積する場」が即ち「学ぶ場」であった。時代が下ると共に機能分化が進み、図書館が前者中心の場になったのは当然としても、IT時代を迎えて今一度原点に立ち戻り、学ぶ場、教育の場としての機能を強化する必要がある。ソフト、ハードの両面から新しい図書館を目指す。

### 職員の専門性活かす

これまで図書館運営は教員である館長のほかは、図書館職員で担ってきた。もともと多くの教員を運営に関わってもらうために、新年度からは副館長制度を導入する。必要に応じて運営に携わる教員を増やし、現在の運営委員会の在り方も再検討する必要がある。教員自身が図書館を活用し、そこで働く立場で運営をチェックする体制にしていかなければ。また教育との連携を強めるために、教養教育の在り方を考える場には必ず図書館の担当者が参画するようにしていく。

ハード面では、中央図書館本館の改築・改修を計画。資料の収集・保存は重要であるが、それに重点が置かれすぎて教育が後回しになっては大学附属図書館として本末転倒。保存していくべき資料を改めて見直し、学生が集い学べる場所を充実させる必要がある。ネット環境やグループ学習室などは既にあるが、もっと充実させたい。イングリッシュ・カフェのような機能を融合させるなど、さまざまなパターンの学習ができるスペースとして附属図書館を機能強化していきたい。新年度は耐震化工事に着手し、将来的に徐々に理想の姿に変えていく。

附属図書館に求められる役割を実現するため、今後どのような改革を行うのか。

図書館を利用する学生たちへメッセージ。

大学附属図書館が人類の叡智が詰まった「知の集積地」であるということとを、あらためて考えてほしい。レポートを書くのとネットで検索すれば情報はたくさん出てくるが、こうして簡単に手に入る知識は薄っぺらなものも多い。長い歴史の評価に耐えた「知」が図書館には蓄積されている。現代は情報を評価する力が問われており、大学附属図書館を利用することで楽しみながらその力を身に付けてほしい。図書館は試験勉強の時だけ利用する場所ではない。在学中だからこそ触れられる貴重な資料、そうした資料に触れられる貴重な時間を大事にしてほしい。

### 教育とのリンク再構築を

2012年度から図書館担当理事となり、附属図書館の現状をどのように見ているか。

一言で言えば「旧態依然」とした雰囲気を感じている。本館の建物構造が古く、残念ながら高校生や新入生が訪れたとして「ここで勉強したい」という雰囲気になっていない。個々の図書館職員はサービス面でさまざまな努力をしているが、資料の収集、保管、貸し出しという旧来の図書館機能やイメージが重くのしかかっており、ハード・ソフト両面でやや古い印象を受ける。

大学附属図書館に求められる役割とは。

資料収集・配布とそれを活かした教育機能を渾然一体化する必要がある。それは図書館単独の力ではできない。教育とのリンクを取り戻し、あるべき姿に戻すことが必要だ。学生が共に学び合うスペースとして最近注目を集めている「ラーニング・コモンズ」を作り、「場」を提供するだけではだめ。場の提供からさらに広げて、収集した資料を「活用」する場を提供しなければ。特に図書館の専門性を活かした教育を行うべきで、ネット時代に求められる情報リテラシーを身に付けさせるために、図書館が必ず必要となる。

こうした役割を実現するには、まずソフト面で職員個々のサービス能力を高め、教育機関で働いている気概を持つことが必要。ソフト面を充実させるには、教育・研究機能に見合った快適なスペースを持った建物にするなどハード面の充実も大切だ。さらに大学外部とリンクすることも求められる。提言を受けると外部の目を運営にも取り入れれば、社会に対してより有効な情報発信をすることにもつながる。



Executive Director ▶ HUH, Nam-ho

### 資源植物科学研究所分館



史料館 3階・雑誌書庫・図書書庫

開館時間 / 月～金 9:00～17:00  
貸出 / 研究所外者への貸出不可  
蔵書数 / 185,970冊  
貴重資料 / Pfeffer文庫  
大原漢籍文庫  
大原農書文庫等

※蔵書数は2012年5月1日現在

### 鹿田分館



2階

開館時間 / 授業期間 ▶ 月～金 9:00～21:00  
土 10:00～17:00  
休業期間 ▶ 月～金 9:00～17:00  
土 10:00～17:00  
※閉館後も24時間利用可能(無人開館、鹿田地区学生・教職員のみ)  
貸出期間 / 図書・製本雑誌 1週間  
未製本雑誌 1日  
貸出冊数 / 5冊  
蔵書数 / 292,761冊  
貴重資料 / 古医書集成等

### 中央図書館



本館 3階・新館 6階

開館時間 / 授業期間 ▶ 月～金 8:40～23:00  
土・日 10:00～18:00  
休業期間 ▶ 月～金 9:00～17:00  
土・日 休館  
貸出期間 / 図書 2週間 雑誌 3日  
貸出冊数 / 10冊  
蔵書数 / 1,654,403冊  
貴重資料 / 池田家文庫  
三浦家文書  
地方資料  
個人文庫等

## 神崎 浩館長に聞く



館長就任当初、図書館職員の専門力が学生や教員に知られていないという印象を持ち、職員・図書館の活動をもっと知ってもらうためPRに努めてきた。例えば新入生らを対象にしたオリエンテーション。組織として開催していない学部で開催を依頼し、かなりの学部が対応していただいた。リポジトリによる論文公開については、学位論文の全文公開義務化の学長決定に従い、図書館と各研究科事務とが連携して学位申請者からスムーズに掲載許諾を得るシステムを構築し、掲載数が大幅にアップしたし、大学が支援しているプロジェクトに関する論文についても、掲載数の増加が達成できた。これらの取り組みは職員の業績にもつながる。

学生の中には図書館を利用していても機能を十分に活用した使い方ができていない場合がある。また図書館として統計データを毎年出していたが、図書館利用率の平均値だけでは利用の実態は見えない。データを精査したところ、実際にはヘビーユーザーがいる一方で利用0回という学生もいた。図書館改革というヘビーユーザーに意見を求めがちだが、利用0回の学生にこそ目を向け「どうしたら利用ようになるか」を考えていく必要がある。そのため、教員が図書館を利用する手法を学生にうまく伝えることが大事だ。

私は学生にレポートなどの課題を出す時、参考文献を図書館で調べさせている。インターネットと異なり、図書館は目的の本周辺に関連資料があるのが利点。関連資料にも目を向けることを繰り返せば、たとえ目的の本がない時でも資料の調べ方そのものが身に付く。「図書館に行く意味」を理解させ、図書館を使う習慣をつけることが大切。図書館職員にも司書資格を持つプロとしての対応を期待したい。

### ▼4月に新館長就任

沖 陽子・環境生命科学研究科教授



図書館は「知のサービス業」であるべき。従来のイメージである個人が静かに学ぶスペース、グループ学習やディベートなど活気あふれる学習スペース、訪れたい楽しさや心地よさを生むスペースが、バランス良く混在する図書館にしていきたい。2013年度から耐震化工事などが始まるので、改革には良いタイミングになると思う。

学生や教職員だけでなく、地域の人や名誉教授、卒業した同窓生が気軽に立ち寄れる場にするのが理想。“知”の満足感を誰もが得られる場であることを広く発信し、地域の図書館なども連携を拡充していきたい。



◀グループで学習する学生たち

附属図書館の職員の業務は本の貸し出し...と思っている学生は多いだろう。しかし図書館職員は司書資格を持つている人も多く、大学の学習を支える大きな力となる。附属図書館では毎年、新入生向けのオリエンテーションだけでなく、「資料の探し方」「データベースの使い方」などの内容で講習会を開催。学

年や専攻に即した講習会を提供している。学生の自主学習をサポートする場所の提供も充実中。パソコンなどの電子機器利用を一切禁止し静かに勉強できる「サイレントスペース」がある一方、

## 学習支える ヒト・バシヨ・モノ



学術成果を世界に発信し、積極的に教育を支える一。  
岡山大学附属図書館はさまざまな場面で変化を始めている。  
その一例を紹介する。

## 貴重資料守り 社会へ還元

大学附属図書館には貴重な資料を収集・保存するだけでなく、それを研究し成果を社会に還元する役割も求められる。

岡山大学附属図書館は、美作国勝山藩の藩政資料「三浦家文書」や古い医学書をコレクションした「古医書集成」(鹿田分館)、資源植物科学研究所の前身を創立した大原孫三郎氏が蒐集した「大原農書文庫」(植物研分館)など多数の貴重資料を所蔵。中でも特に有名なのが、江戸時代に岡山藩主だった池田家に伝わる文書や絵図を総数10万点以上集めた「池田家文庫」だ。戦災の中、奇跡的に焼け残った同文庫が、池田家の好意や大学設立期成会など市民の尽力で岡山大学に移管された経緯があり「社会へ還元する義務が課されている」とする附属図書館。約

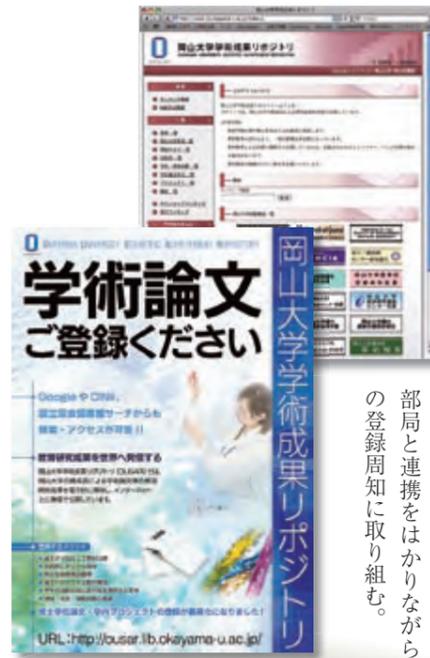


▲池田家文庫でも向けワークショップ

3000点の絵図やマイクロ目録などをデータベース化しHP上で公開しているほか、レプリカやデジタルデータなどの貸し出し、提供依頼にも積極的に対応する。また岡山シティミュージアムで毎年「池田家文庫絵図展」を開催し、一般の人が貴重資料に触れる機会を提供。絵図を手に岡山の街を歩く企画は、毎回多くの歴史ファンが詰めかける人気企画となっているほか、教育学部学生が案内役となり小中学生とともに後楽園を探索する「池田家文庫こども向けワークショップ」を開催するなど、資料を活用して社会とのつながりを深めている。

大学の教育研究成果を社会に還元することが求められている今、学術情報を積極的に情報発信する必要性が年々高まっている。その役割の一翼を担う存在が附属図書館だ。

岡山大学附属図書館では、学術論文など学内の研究成果を集積しインターネットを通じて無償公開するサービス「岡山大学学術成果リポジトリ」を2006年度から運用開始。当初は紀要などを中心に登録を進めていたが、登録件数拡大に向け2011年度11月から学位論文(博士)と学内プロジェクトの研究成果の無償公開を原則義務化。グループや国立国会図書館サーチなどからも検索・アクセス可能。



2013年1月末現在で登録件数は3万1193件。全文ダウンロード件数は71万5339件(2012年4月〜2013年1月)で、既に昨年度1年間(2011年4月〜2012年3月)を10万件以上上回っている。中には1か月で1500件以上ダウンロードされる論文も。「メリットを感じ、論文を発表するたびに登録してくれる先生も少しずつ増えてきた」(附属図書館)という。今後も大学